

# 川崎市立 日本民家園

日本民家園だより 35号 平成8年10月15日 編集・発行 川崎市立日本民家園

## 民家園まつりはじまる!!

「日本民家園まつり」が秋も深まる10月から11月にかけて開催されます。その中で11月3日（文化の日）は恒例の芸能公演があり、今年は新城郷土芸能囃子曲持保存会の「囃子・曲持」、栗木粉屋踊保存会の「粉屋踊」が予定されています。公演場所は旧船越の歌舞伎舞台で、三重県大王町、志摩半島の漁村にあった建物です。花道や回り舞台を備えた立派なもので安政4年（1857年）に建築された建物で、国指定重要有

形民俗文化財に指定されています。この他、期間中には民家園講座「中世の建築—その形と心—」、体験学習「はた織り」「紙すき」、民具製作技術保存会の作品展示、実演、伝統技術技法を保存継承する会の実演、お茶の会、古民家の床上公開、園内民家の解説ツアーなど多くの行事が予定されています。この機会に民家園で秋の1日をお楽しみください。



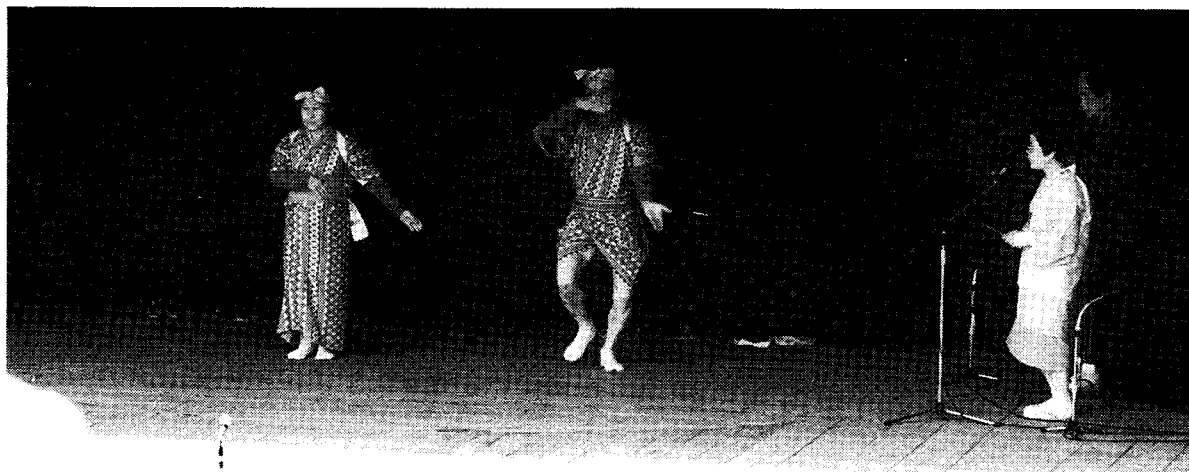
新城囃子曲持の公演

## 〔 芸能公演出演団体紹介 〕

### 「粉屋踊」 栗木粉屋踊保存会

粉屋踊りは、万作踊りとか飴屋踊りなどと呼ばれ、かつては関東一円に広く伝えられた民間芸能です。神奈川県下でも三浦市や横浜市の農村をはじめ鎌倉などでも行われていましたが、現在ではそのほとんどが廃絶されています。

栗木の粉屋踊りは大正3年頃、村の飯塚伝蔵さんや飯草鶴吉さん達によって町田市小野路の師匠から習い覚えたものが初めてであったといわれています。



### 「囃子・曲持」 新城郷土芸能囃子曲持保存会

曲持というのは、若者連中の力くらべから生まれたものです。市内でも「力石」とか「さし石」とか呼ばれる大きな卵形の石が各地の神社の境内などに見られますが、こうした石や臼などを力自慢の若者が持ち上げたりして腕をきそったものでした。

昔の新城は、稲毛米の産地であったことから日頃あつかっている俵を自由自在にこなす技が「曲持」となって伝えられたものと思われます。この新城の曲持は、市内多摩川畔の諏訪の森の力持連中から手ほどきをうけてはじまったと伝えられています。最近までは井田でも行われていましたが、今では新城だけで続けられています。曲持は村祭りや棟上げ式などのめでたい時に行われ、芸をする力士、解説をする口上師、囃子連中で構成されます。力士の芸の間は囃子が奏されます。

(川崎市無形文化財指定)

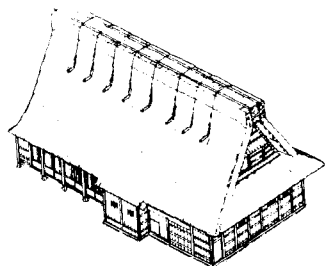


## 秋の日本民家園まつり参加企画

### 民家園講座『中世の建築—その形と心』

- 10月 5日 「寺院建築における中世的なるもの」  
講師：東京大学名誉教授 太田博太郎氏
- 10月 12日 「ロマネスクとゴシックⅠ」  
講師：横浜国立大学教授 関口欣也氏
- 10月 19日 「ロマネスクとゴシックⅡ」  
講師：横浜国立大学教授 関口欣也氏
- 10月 26日 「厨子から中世建築をみる」  
講師：日本民家園技術職員 大野 敏氏

### 園内民家の解説ツアー

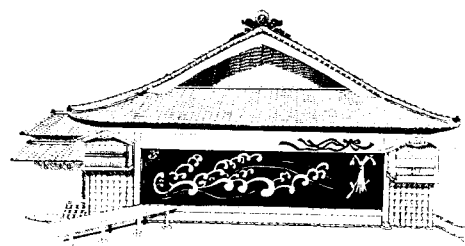


#### ◆トータルコース(全民家を二回に分けて解説)

- 第1回 10月11日(金) PM1:30~3:30  
原家から野原家まで 集合場所 原家の前
- 第2回 10月18日(金) PM1:30~3:30  
作田家から菅原家まで 集合場所 作田家の前
- ツアースタッフ 民家園技術職員 大野 敏氏

#### ◆ポイントコース(幾つかの民家を重点的に解説)

- 第1回 10月16日(水) PM1:30~2:30  
原家とその周辺 集合場所 原家の前
- 第2回 10月23日(水) PM1:30~2:30  
船越の舞台とその周辺 集合場所 船越の舞台
- ツアースタッフ 民家園学芸員 三輪修三氏



### 民家の床上公開—直火のぬくもり・囲炉裏を囲んで

ボランティアグループ「炉端の会」では11月3日を中心に当番棟のほか、菅原家など複数棟の公開を実施いたします。

#### お茶席の会—枯淡な味をあじわう

- 10月27日(日) 会場：佐々木家住宅 たちばな会  
11月 9日(土) 会場：佐々木家住宅 川崎文化財友の会  
むずかしい作法はありません。どうぞお気軽に 一服300円

#### 津軽三味線—日本の音にふれる

- 10月26日(土) PM2:00 演奏：小山貢貴氏 他  
10月27日(日) PM1:00~  
会場：工藤家住宅 演奏：木田 林松藤氏

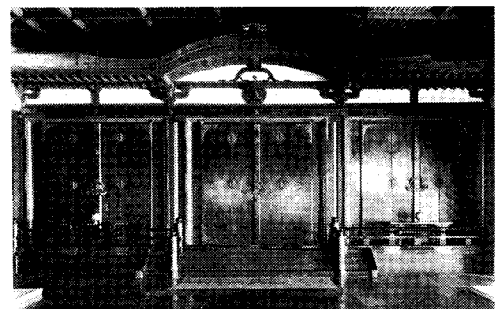
# 建物の見どころとしくみ — 船越の舞台その3 —

今回は舞台を正面から見てみましょう。大きな屋根の両脇に、小さな屋根をもった出窓のようなものがあるのに気が付きましたか。これは「出語り」と呼ばれ、舞台の音響を担当するスピーカーのような部分です。

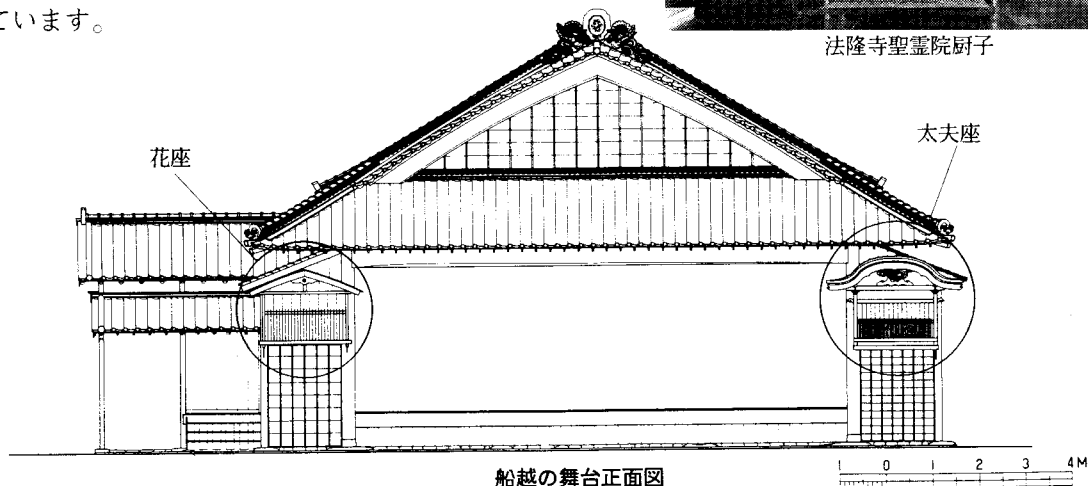
この部分の床は中2階となっており、向かって右側は語り手の席で「太夫座」と呼ばれ、下方を囃し場とします。向かって左側は「花座」と呼ばれ、本来は太夫座に準じるものと思われませんが、実際は舞台興行の関係者の座として使われることが多かったようです。突出部分をよくみると太夫座・花座とも少し内側に向けてつくられています。これは音響効果と共に視覚的な安定感を意図したものと考えられ、舞台建設にかかわった先人たちの知恵と工夫に改めて感服します。

また、太夫座と花座はそれぞれデザインが異なる点にも注目して下さい。太夫座は、独特の曲線をもつ唐破風屋根とし、妻面は臺股を置き、柱上は組物をのせるなど、社寺建築のようなつくりになっています。これに対して花座は屋根を切妻造とし、全体的に素朴なつくりです。こうした違いは、太夫座の方を上位とする考え方のあらわれですが、全国的にみると必ずしも左右の出語りに差をつけたものばかりでなく、左右対称の場合も存在しています。

なお、唐破風についてふれておきます。破風とは屋根の端部に付ける板のことで、垂木をかくす化粧の役目を果たします。本来は直線状の板で、屋根に反りを付けた場合は円弧状になりますが、いずれも中国の建築をお手本としたものです。しかし日本では、平安時代後期頃から照りむくり曲線による優雅な破風が登場します。これが唐破風です。この形は中国には見ることが出来ず、我が国の住宅建築に由来すると考えられています。したがって日本のオリジナル形式を「唐破風」と呼ぶのはおかしなことですが、この場合の「唐」は「中国風の」という意味でなく「新式の」といった程度の意味であるといえます。法隆寺の聖霊院の厨子（鎌倉時代後期）は現存する唐破風の最古かつ最優秀な例です。蛇足ながら、寺院の湯屋には蒸し風呂の入口に唐破風を付けたものが見られます。どうして唐破風なのかはわかりませんが、銭湯の入口が唐破風造りなのは、寺院のからの影響といえそうです。



法隆寺聖霊院厨子



船越の舞台正面図